

Face to Face で広がる国際交流

—小さな勇気が大きな輪へ—

岩手県立大学 高等教育推進センター 教授 劉 文静

1. Schulen helfen Schulen の岩手県での事例紹介

ドイツ語の Schulen helfen Schulen とは、日本語で学校が学校を支援するという意味の復興支援活動である。この活動について雫石町を事例に今なお続いている国際交流の実態、そして雫石町はこれを機に東京オリンピックのホストタウンに登録されるなど、今なお広がり続けている支援の輪を紹介する。

この交流事業の特徴は、①姉妹都市や友好関係にある学校同士ではないこと、②実業中学校が主体となり、教員や生徒たち自らが考えて動いたこと。③学校訪問と慰問活動など Face to Face の顔が見える関係による強い絆のもとに続いていることが挙げられる。

2. 雫石町とドイツの交流の歴史

1995年に雫石町国際交流協会がドイツ南西部のバーデン＝ヴュルテンベルク州 Bad Wimpfen 市（BW 市）を訪問し、ホームステイによる青少年交換留学を実施し、雫石町と BW 市の観光交流について検討していく覚書を交わしたところから始まった。

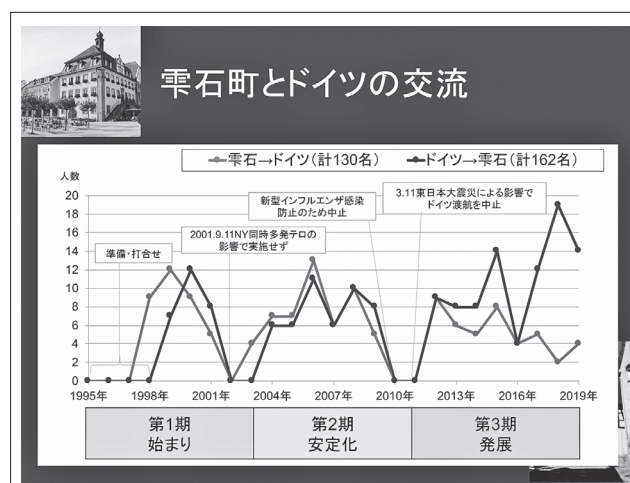
2003年に BW 市の受入先であった学校の校長が異動したことにより交換留学事業の継続が困難となった。それを受け、BW 市の当時の市議員の一人が、自分が務めていた隣の町 Neckarsulm 市（N 市）の HGR 校が雫石町からの留学生を受け入れら

れるよう斡旋し、交流校の変更に導いた。以降現在まで 25 年間交流は継続し、日独の多くの青少年に夢と希望を与えている。

異なる学校生活、文化、地域住民の生活スタイルなどを自分の目で見て、感じる事がこの国際交流の大きな目的である。ドイツの両市では交換留学事業参加を機に日本語に興味を持ったドイツの生徒もあり、「Iwate」「Shizukuishi」「Origami」「Sansaodori」「Kimono」「Zazen」など日本や岩手を象徴するキーワードも覚えられるなど、自主的な学習を促したと言える。

3. Schulen helfen Schulen の始まり

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。その衝撃的な映像は Neckarsulm 市の交換留学に参加した生徒、教師らに大きなショックを与え、日本を訪れた際の忘れ難い経験、もてなしに対し何かお返しをしたいという気持ちから援助の方策を模索し始めた。幸いにも交流のあった雫石町は内陸部に位置しており比較的被害が少なかったため、被害の大きかった沿岸部の学校への支援が検



討された。交流先のドイツ HGR 校の教員と生徒により「Schulen helfen Schulen」（学校が学校を援助する）というスローガンが提案され、雫石町国際交流協会は窓口の役割を果たすことになった。

4. Schulen helfen Schulen の内容

ここで私は、今までの農村研究の経験から face to face、顔が見える関係での支援を提案した。これはネット社会の現在、情報を瞬時にキャッチすることは可能であるが、実際に自分の目で見て、自分の言葉で会話することが大切であるとの思いから、産直のように顔を合わせることでお互いの反応を確認し、励み合い、発展し合っていけるようにとの思いがあった。

N 市の中・高校から支援の意思表示があり、オープンキャンパスでの手づくりケーキの販売や募金活動、バザーの開設など積極的な活動により 3 万 7,000 ユーロ（約 500 万円）の支援金が集まり、岩泉町、宮古市、山田町、陸前高田市の 6 カ所の学校に支援金を寄付することができた。その多くは津波で流されてすぐには手に入れることができなかった部活動の道具やユニフォーム購入に活用され、被災地からは「外国の若者たちから一歩前に踏み出す勇気をもらった」と感謝の意が表された。窓口となった雫石町国際交流協会はこの功績が認められ、2016 年に総務大臣賞を受賞している。

5. 現在の国際交流の内容

訪問期間は約 10 日でホームステイ形式、訪問先の授業にも参加し、地域社会とのふれあいでドイツではオーディ工場の見学、農家、町並み見学や食文化の体験などである。この様子は感想文という形で報告書に必ずまとめられている。日本では田植え、座禅、書道、着つけといった伝統文化体験や沿岸部の海岸、東京などの大都市訪問を行っている。さらに、近年では HGR 校を中心にしながら、ASG 高校も交流に加わるなど、交流の輪も広がっている。



6. 終わりに

国際交流も国際関係も結局は人と人の交流である。25 年の間にドイツ側の 2 つの市の歴代市長や校長との間でお互いに尊敬し、信頼し合う関係を築いてきたことが心の通じ合いの大切さを教えてくれた。

現在、雫石町から参加する人数が経済的理由により減少していること、日本人学生は英語によるコミュニケーション不足感があることが課題である。この face to face のコミュニケーション



ンは言葉や文化の違いといった壁があるため勇気が必要であるが、だからこそ体にしみる一生の思い出になるかもしれない。研究者としてその顔が見える支援活動へのアドバイスが、雫石町国際交流協会の手によりドイツの学校と岩手県沿岸部の学校との顔の見える関係の実現に繋がったのではないかとと思われる。

